
将棋少女恭子の日常

ソースケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

将棋少女恭子の日常

【Nコード】

N5718E

【作者名】

ソースケ

【あらすじ】

西里恭子。それが彼女の名前だった。高校三年生。趣味は将棋。腕は女子ながら県トップレベル。将棋が趣味という、少し(?)変わった女子高生のお話をご堪能ください。

将棋少女恭子の日常：第一話（前書き）

この作品は私のHPで連載しているのですが、こちらのほうがたくさんの方に読んでもらえそうなのでこちらにも投稿させていただくことにしました。

HPでのハンドルネームは夜神楽、といいます。
つたない作品ですが、ぜひ応援ください。

将棋少女恭子の日常：第一話

桜吹雪の中、制服をまとった一人の少女が、本を読みながら歩いて
いた。

ショートカットに切れ長の瞳が特徴的な、かわいい、というより綺
麗な少女だった。

やたら真剣な顔つきをしている。

少女はその顔つきのまま、『私立聖火高等学校』と書かれた門をく
ぐった。

校内は始業式独特の活気と騒音に満ちていた。

「おはようございます、恭子さん」

門をくぐってすぐ、少女は声をかけられた。

品のいいロングヘアに、おっとりとした口調。

恭子の友人の、和歌月花恋わかづき かれんだった。

「ん、花恋。おはよう」

ようやく本から視線をはずし、声をかけてくれた友人のほうに顔を
向ける。

「恭子さん、私たち、同じクラスですよ」

うれしそうに花恋がそう報告する。

恭子と花恋は幼馴染で、親友どうしでもあるのだ。

「ああ、そうなんだ。今年一年、よろしくね」

そういつて恭子は右手を差し出した。

差し出された手を握りながら、花恋は少しうれしそうに続ける。

「あと・・・彼も同じクラスですよ」

「あ、そうなんだ。幼馴染揃い踏みって感じね」

うわさをすればなんとやら、その『彼』が向こうから歩いてやってくる。

「おー、西里、和歌月。おはようー」

二人を苗字で呼んだのは、快活な感じの、長身の青年だった。

二人の幼馴染、青木裕介。

テニス部に所属しているためか、がっちりとした体つきで、長身なので遠くからでも目立っていた。

「おはよう。同じクラスなんだって？」

恭子は正門はいつてすぐにある、噴水のふちに腰掛けながら、青木

に聞く。

「うん。張り出し見てきた。三人とも同じだったよ」

「そうかー……。あたしたちいままで見事にばらばらだったのに、最後の学年だけはみんな同じクラスになったか」

読んでいた本をかばんにしまいながら、恭子はそういった。

「楽しくなりそうだよなー……。体育祭とか、修学旅行とか」

「ん、まあ、そうかもね」

あまり興味のなさそうな恭子に、ちょっと裕介はがっかりしたような表情を作った。

そんな二人のやり取りを見て、花恋はくすくすと笑いをもらしている。

そんな時、向こうのほうから手を振っている一人の男子生徒がいた。

花恋の恋人だった。

「あ……。私のカレですわね……。すみませんが、私はこれで失礼しますね」

「ふーん……。恋人、いたんだ……。」

ちよつと意地悪っぽく恭子が言う。

「あ・・・別に隠していたわけでは。春休み中に流れでお付き合いすること・・・」

ちよつと赤面して言う花恋。

「あつそ・・・まあ、いいんだけどね。友達として寂しいなあつて」

「き、機会があれば言つつもりでしたのよ？もちろん・・・」

「はいはい、もう言い訳はいいから。行つておいで」

そついうと恭子は手をひらひらさせて、笑顔を作つた。

花恋は照れ笑いを浮かべながらも、その彼のほうへ小走りに去つていく。

「そつか・・・カレシか。あの子ももうそんな歳になつたのね・・・」

なぜか感慨深く言う恭子。

「つてお前も同じ歳だろ？彼氏とかいないの？」

ちよつと期待を込めたような感じで、裕介はつつ込んだ。

「うん。いないなあ。今までもほしいつて思ったこともないし」

「そうかあ・・・将棋ばかりしてないで彼氏の一人でも作つたほうが学生生活楽しいぞ」

「・・・あたしがどういう学園生活送ろうが、ほつといてよ」

恭子は将棋という、年頃の女の子には非常に珍しい趣味を持っていた。

並の入れ込みようではない。

県レベルトップの実力で、アマチュア四段の免状を持っている。

さつき真剣に読んでいた本も、将棋の本だったのだ。

暇さえあれば、恭子は将棋の本を読んでいる。

頭を使うのは好きなようで、勉強もよくできる。

教師たちからは『西里なら県レベルトップの大学へ進学してくれる』とひそかに期待されていたりする。

「・・・好きなやつとかもないのか？」

ちよつと色気を出した期待したような口調で、裕介は恭子にそう聞いた。

「うん、いないよ。そんな暇もないって感じかな。あたしのことなんか気にしないで、あんたこそ彼女でも作ったら？割と人気あるでしょ、女子に」

「え・・・いや、そんなこともないんだけどな・・・」

鈍感すぎる少女の答えに、さすがに落胆の声色を隠せない、若い裕介であった。

「ただいま・・・と」

終業式を終え、恭子は自宅へ戻ってきた。

ごく普通の、2階建ての一戸建て。

それが恭子の自宅で・・・親の残してくれた財産だった。

恭子の父親は恭子が中学3年生のときに交通事故で亡くなった。

恭子の母も、後を追うように高校2年のとき、病で亡くなった。

『俺たちに万が一のことがあったときのために、保険だけはちゃんととしかないと』

それが恭子の両親の口癖だった。

皮肉にも、それが現実のものとなり、恭子が社会に出るぐらいまでなら困らないだけの財産を残して、両親は逝ってしまったのだった。

「さて・・・と」

二階の、一応自分のプライベートルームときめている部屋に戻った恭子は、もうだいたい古びた将棋盤を取り出し、駒をぱちぱち並べ始める。

日課の、プロの将棋指しの棋譜並べだ。

好きなプロの棋譜を並べながら、恭子は今日の友人たちとのやり取りを思い出していた。

「恋人・・・かあ・・・」

恋人というか、恋愛というのは恭子の仲では小説やドラマの中の出来事であり、どうにも現実感がなかった。

（そんなに大事なことなのかしら・・・？）

ぱちぱち将棋の駒を動かしながら、恭子は疑問に思う。

いたらいたで楽しいのかもしれない。

でも、ドラマや小説みたいに、あんなに熱情的に、命をかけるほどまでのめりこめるものなのだろうか、恋愛って。

この年頃の女の子にしては、恭子はドライな恋愛感を持っているようだ。

（まあ、確かに、一人で寂しいって思うことはあるけどね・・・）

でも、結局人は、一人なんだと思う。

家族でさえ、こつこつと自分の前からいなくなってしまうのだから。

恋人とはいえ・・・赤の他人が自分とずっといてくれるのだろうか。

・・・ありえない。

結局また、余計寂しい思いをするだけなのでは。

（あはは・・・恋人どころか、片思いもしたことないのに、あたし何考えてるだろ）

きつと、春のせいだ。

春の暖かさと、窓から見える桜の美しさは何かこういうことを考えさせられる雰囲気を持っている。

恭子はそう考えることにした。

棋譜並べに夢中になっているうちに、いつの間にか陽が暮れかけているのに恭子は気づいた。

（あ・・・買い物行かないと。もう冷蔵庫に何も残ってなかったよ
うな気がする）

恭子はあわてて駒の枚数を数えてから駒をしまい、将棋盤を定位置に戻した。

それから制服から私服に着替えて、お財布もって商店街へ向かう。

実は恭子、服のおしゃれにも興味がない。

白いＴシャツにＧパン。

まるで専業主婦のようないでたちである。

専業主婦でも、もうちょっとおしゃれに気を使つかもしれない。

中学のときから母の手伝いもしていたので、家事は手馴れたものだった。

恭子の家はいつも綺麗だ。

（恋人がいたら、あたしの手料理を・・・？）

・・・変だ。こんなこと考えたこともなかったのに。

きつと今日の友達との会話と、春のせいね・・・。

恭子は自分にそう言い聞かせて、商店街へ急ぐのだった。

（続）

将棋少女恭子の日常：第一話（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございます。

読まれた時間があなたにとって少しでも楽しい時間になったのなら、私はとてもうれしい。

私自身将棋が趣味なのですが、実力のほどはアマ5級ほどで・・・。
いやはや、お恥ずかしい。

下手の横好き、といいますが、こうしてお話にするぐらい、将棋は好きです。

3話までは完成しておりますので、順次アップしていきたいと思っております。

皆様の感想批評、お待ちしております。

将棋少女恭子の日常：第二話

学校の帰りの通学路。

「・・・・・・・・」

裕介が少しあきれたような顔で、恭子を見ている。

「・・・・・・・・」

その隣を歩いていた花恋も同様の視線を恭子に向けている。

「・・・なによ、二人とも。その顔は」

「だって・・・」

「なあ・・・」

花恋と裕介は顔を合わせ、ふう・・・とあきたため息をついた。

「あのさあ、西里。お前がちょっと変わってるってのは知ってたよ。でもあのシーンで・・・」

「笑うことはないでしょう」

裕介と花恋の二人はたしなめるようにそうつ。

恭子も黙って聞いてない。

反論を開始する。

だが、出てきた言葉は、

「だって・・・だって・・・面白かったんだもん」

まるで子供のいいわけだった。

事の起こりは今日のロングホームルームの5、6時間目だった。

その日は担任の計らいで視聴覚室でビデオ鑑賞ということになった。

鑑賞することになった映画は『タイタニック』。

ひとむかし前に大ヒットした、恋愛スペクタクルである。

ディカプリオ演じるジャックという主人公の男が船に乗り込んだり、彼がウインスレット演じるローズという良家のお嬢様に出会ったり、船の先端で二人がいちゃついたり、氷に船がぶつかったりするまではよかった。

問題はそのあとのシーンである。

氷山に船がぶつかり、船は真っ二つになった。

沈み行く船。

ローズは何とか救助船に乗り込めたものの、ジャックは冷たい海に

放りだされてしまう。

恋人を案じながら冷たい海に沈んでいくジャック……。

涙なしに見られないシーンである。

事実、初めてこの映画を見たであろう女子生徒たちの中には、涙をぼろぼろこぼしているものも何人もいた。

だが、ただひとり。

「ぷっ……くくく」

なぜか笑いを我慢してる恭子。

「ははは……、くくく……ジャックが沈んでく……くくく」

……おかしいところに笑いのツボがあるらしい恭子は、必死で笑いをこらえているようだった。

クラスメートの数人がそれに気づき、回りにヒソヒソと恭子の様子を伝える。

普段おとなしくてクールな感じの西里が、なぜか感動シーンを見て笑いをこらえているぞ。

そんな感じである。

一気にしらける視聴覚室。

「ふふふ・・・はは・・・・・・?」

周りの空気に気づいた恭子は「こほんっ!」と咳払いをして無表情を取り繕ったが、時すでに遅し。

全クラスメートの奇妙なものを見るような視線が、恭子に突き刺さっていたのだった。

「将棋ばかりしているから、そんな変な感覚が身につくのではありませんか?」

やはり呆れ顔続行中の花恋が、そう恭子を非難する。

「将棋は関係ないでしょ。たぶん・・・」

ちよつと自信なさげに答える恭子。

確かに将棋のプロのエッセイやブログなんかをみると、少し変わった人が多いような気がするが・・・。

いやいや、私はプロではないのだし、ただの将棋好きの、普遍的な女子高生なのだと思います。

「恋愛経験が圧倒的に不足してるからじゃないのか?何ならかつこいいのを紹介してやろうか?」

冗談めかして言う裕介に恭子は

「結構。こう見えて私は忙しいの。そんな暇があるならプロの棋譜でも並べているわ」

と、すげなく断ってしまった。

まあ、裕介もこのときは本気で男の子を紹介するつもりもなかったのだが・・・。

それから一週間後、ちょっとした事件が起こるのだった。

ある日の昼休み。

恭子や花恋含むクラスメート達と談笑中のとき。

「青木。ちょっと、いいか？」

教室の窓からいきなり裕介は呼ばれた。

彼を呼び出したのは同じテニス部に所属する、二つとなりの組に属する男子生徒の水野。

裕介は彼と割と親しくしていて、部活が終わったあとにラーメンやファーストフードをおごったりおごられたりする仲だった。

「ちょっと、すまん」

その場に断りを入れて、裕介はその男子生徒の元へやってきた。

「水野。どうした」

「ちょっと相談が・・・ここじゃなんだから、学食のほうへ行かないか？」

少しおずおず、といった感じで彼はそういった。

「まあ、かわまないけど」

「すまん、助かる」

そういうと水野は微笑を浮かべて先に歩き出すのだった。

学食の裏手、パックジュース片手に人気のないベンチに二人は腰掛けた。

「で、なんだ？相談って」

ちゅうちゅうストローをすいながら、裕介は聞いた。

「実は・・・二年のとき同じクラスだった人が好きで・・・」

ちよっとテレながら、水野はそう激白した。

「ほう、それはそれで、誰なんだ一体？」

「お前と同じクラスの、西里さんなんだ」

「・・・・・・・・・・！」

思わずジュースを噴出しそうになった。

ただ、なぜ自分のところに相談に来たかは分かった。

彼には恭子と花恋が幼馴染であることを、雑談の中で話したことがある。

ともかくジュースをのどに流し込み、裕介は聞く。

「西里かあ……。で、どこが好きなんだ」

水野は恋するものの独特の潤むような瞳で語りだした。

「クールビューティーっていうか、あの冷静沈着なところか……物静かだけど、輝いているっていうか……大人びた顔とか……ショートカットもとてもなく似合ってて……それから……」

「もういい、分かった」

幼馴染を延々と色眼鏡をかけたボケ老人のように語られても、むずがゆいだけであつた。

まあ……悪い気もなかったが。

「で、どうすればいいんだ？どっかに呼び出す役ぐらいなら買つてやってもいいが……」

といって思い出した。

「そついやあいつ、『恋人になる男は最低でもあたしに二枚落ちで勝つぐらいじゃないといやね』とか言ってたな。本気かどうかはしらんが」

「二枚落ち？それって将棋のことか？」

「そつだろ、きつと」

裕介がそう答えると、水野の顔が急に輝きだした。

「そつか、将棋か。そついや彼女が休み時間に将棋の本を読んでいたのを覚えている。中学でテニス始めてからすっかりご無沙汰だけど、俺小学校のときは将棋部にいて、一番強かったんだ。そこから西里さんの気を引けるかも・・・」

「でもあいつ、半端なく強いらしいぞ。県の中で5本にはいる腕だとか豪語してたからなあ。俺もあいつと将棋したけど、どんなにハンデつけてもらっても勝ったことがない」

そついう裕介に水野は胸を叩いた。

「俺なら二枚落ちなら何とかかなりそつな気がする。一週間、勉強する。青木、すまんがそれで告白の舞台を設定してくれないか？」

自身ありげに言う水野に、裕介は分かった、とだけ返事した。

で、当日。

「一体誰よ？放課後にあたしに用事のあるひとつて」

「まあ、ちよつと待て。もうすぐ来るから」

結局裕介は、お前に用のあるやつがいるから、今日放課後残つてくれ、とだけ言つて恭子を待たせている。

「すまん、またせた」

ガラガラと教室の扉を開け、水野がやってきた。

「あれ？用があるのつて、水野君なの？」

それほど親しくなかった、去年のクラスメートが一体何の用だろう？

思案顔の恭子に、水野は先制攻撃とばかりに畳み掛けた。

「西里さん、いきなりで驚くかもしれないけど、俺、君の事が好きなんだ」

「えっ？」

もちろんあわてる恭子。

「いや、でも今あたし男の子と付き合う気持ちになんかならないし・・・その、いきなり・・・」

すると水野はかばんの中から、折りたたみの将棋盤を取り出した。

「二枚落ちで君に勝つたら、付き合っの考えてくれないか？青木から聞いたんだ。君と付き合おうと思ったら、最低でも二枚落ちで勝たないとダメなんだろう？チャンスをもらえないだろうか」

いきなりの告白にはあわてた恭子だったが、将棋盤を見つめる眼は冷静だった。

少し考慮して、恭子はこう答えた。

「いいわよ。二枚落ちであたしに勝てたら、付き合っの考えても」

こんな告白ってあるんだろうか。

告白した相手が、告白されたほうと将棋を指して、勝ったら付き合う。

まあ、恭子らしいともいえなくもないかな・・・。

そう思いながら裕介は駒を並べる二人をじっと観察していた。

水野は緊張しているようだったし、恭子はうれしそうに駒を並べている。

将棋をしているときの恭子はいつも楽しそうにしている。

大量のハンデをつけて、裕介にばる勝ちしているときもそうだった。

「じゃあ、飛車と角を落とすわね」

駒を並べ終えた恭子は、自分の陣地の二段目に並んでいる大きな駒を二つポケットへしまいこんだ。

将棋の二枚落ちというハンデはサッカーで言うとツートップのフォワードがいなくらいのハンデだろうか。

相当なハンデにもかかわらず、恭子は余裕綽々に見えた。

「おねがいします」

「あ、お願いします・・・」

恭子が先に頭を下げると、水野もあわててそれに追隨した。

それからすぐに、恭子の第一手目が堂に入った仕草で、ぱちり、と指す。

間髪いれずに二手目水野もぱちり。

三手目恭子ぱちり。

四手目のことだった。

水野が少し緊張気味に、そっと右側の小さな駒、歩ふを動かした。

それを見て恭子は、感嘆の声を上げる。

「へえ。二枚落ちの定跡、知ってるんだ」

「今日のために部活も休んで、二枚落ちを一日4時間勉強したからね」

にやり、と少しニヒルな微笑で返す水野。

「それはそれは……。じゃああたしも本気で行かないとね」

につこり微笑んで恭子は、ばちん、と少し気合を入れて駒を振り下ろすのだった。

それから一時間。

（二人ともよく考えるよなあ・・・）

裕介は結果を見届けようと、最初からずっと、二人の対局を見ていた。

将棋というゲームは、相手の王様を動けなくしたほうの勝ちである。

恭子の王様は水野の駒に追い掛け回されてすでに自分の陣地を出てしまっていた。

一方水野の王様もすでにお城を壊されて、逃げ切れるのか、つかまるのか、これも微妙なところだった。

そこで恭子が王手をかける。

（角で王手・・・）

水野はあせった。

王様を逃げ間違えると、あっという間につかまる可能性がある。

右はない。退路が狭すぎる。

上？

下？

それとも左……。

ここさえしのげば、こっちの勝ちだ。

よく見ろ、よく読め……。

勘に任せて王様をつまみ、上に逃げた。

それを見た恭子は、

「あ！はっはっはっ！上に逃げたの。そう」

何々大笑すると、水野の王様のお尻に金を置いた。

（えっ？）

水野の王様が逃げる。

恭子の駒がそれを追う。

それから15手目。

「あ……」

水野の王様はとうとう逃げ道がなくなってしまった。

「どうかしら？」

につこり得意げに微笑む恭子に、水野はこういうしかなかった。

「……負けました」

「うん、そうね。角で王手したときにこっちに逃げたら、まだ分からなかったわね。上に逃げたら19手詰めが見えてたのよ」

得意げに言う恭子に水野は驚くばかりだった。

「19手詰めが分かるの？」

「まあ、いちおう。そんなに難しい形じゃなかったし」

「……」

手合い違いだ、と水野は思った。

こりゃもつとハンデをつけてもらわんと勝てないな。

「というわけでお付き合いの件はなかったことに。うん、でもまあ、いい線いってたわ。続けてたら強くなるかもね。ありがとうございました」

恭子は局後の挨拶を交わす。

「ありがとうございました」

丁寧に水野も頭を下げた。

「じゃあ、あたし帰るね。バイバイ」

手をひらひらさせて、恭子はあっさりと教室から出て行ってしまった。

「うーん・・・残念だったな、水野」

ポン、と裕介は水野の肩を叩いた。

「ああ・・・でも、この告白、してよかったよ」

「そうか」

「俺の王様の逃げ道を見切ったときの彼女の笑顔・・・あんないい笑顔をする女の子だったんだな、西里さんって。それと・・・」

「それと？」

「西里さんがいつも輝いて見えた理由が、今の将棋で分かった気がするよ。彼女、きつとほんとに将棋が好きなんだろうな。それで、

一生懸命打ち込んでる・・・」

かしゃかしゃと駒をなおしながら水野はいった。

「俺も好きなこと・・・がんばろう。そしたら、彼女のように、輝けるかもしれない」

次の日。

「なあ」

裕介は朝教室にやってきた恭子に声をかけた。

「ん？」

「もし負けてたらどうしてたんだ？ほんとに水野と付き合うつつもりだったのか？」

恭子は明らかにしなれていないと分かるウイंकをして、

「勝負にタラレバはないのよ」

とだけ、返事した。

続く。

将棋少女恭子の日常：第二話（後書き）

第二話をお送りします。

三話までは書きあがっておりますので、明日まではすんなり更新できと思っています。

少しでもたくさんの方に読んでいただけたら、幸いです。
また、お会いしましょう。

将棋少女恭子の日常：第三話

えー・・・静かにしてくださいっ！」

教壇で叫んでいる一人の女子生徒。

このクラスの委員長だった。

「5月11日12日に行われる文化祭の出し物についての意見を・
・ってか、ほんと静かにしろっ！」

ばんっ！！

とうとう委員長は切れたらしく、激しく黒板を叩いた。

チョークの白い粉があたりを舞う。

珍しいことに、この学校では5月に文化祭を行っていた。

定番の11月では、受験生も追い込みに差し掛かっていて、気持ち的に楽しめない。

それなら季節も良くて、比較的受験まで余裕のある5月にしまおう。

そういうことらしかった。

「いやいや、イインチョ。俺たちは一生懸命文化祭の出し物について話し合っているんだよ」

「そうそう」

委員長の激に、あたりがやる気なさそうに答える。

それらの言い分に、委員長は怒りでまゆをひくひくさせた。

「ほーう・・・あなたたちは高校の文化祭で、雀荘やら風俗店やらキャバクラをやりたい、と？」

そう、今返事した連中は実現できそうにもない、しょうもない妄想話を延々と繰り返していたのだった。

「イインチョ。最初からこれはダメ、アレはダメ、といってたら斬新なアイデアは出ないよ？」

「そうそう」

「・・・だからといって高校の文化祭で、キャバクラやら風俗店などできるかあっ！」

再び怒鳴る委員長。

HRが始まってから委員長の血圧は、うなぎのぼりで上昇中だった。

このままでは、若くして脳溢血に倒れる危険性すらあった。

そんな危機をよそに。

「西里。お前はなんかやりたいことはあるか？」

裕介は文化祭にまったく興味を示すこともなく、本を読んでいた幼馴染、西里恭子に声をかけた。

ちなみに読んでいた本は『四間飛車VS居飛車穴熊血戦譜』という将棋の本だった。

「ん・・・？そうね、対居飛車穴熊に対する振り飛車の歴史展示なんてどう？将棋の歴史を振り返る上で、大変意義深いと思うけど」

「果てしなくつまんさそうだし、意味が分からん。お前はみゆきか・・・？」

裕介は分かる人だけに分かるボケを繰り出す。

「つまんなさそうとは大変失礼ね。ところでみゆきって？誰それ？」

自分の趣味をつまらないといわれて面白くなさそうな顔をする恭子だったが、ボケに対するツッコミは忘れない。

「・・・妄言だ。忘れろ」

軽くかぶりを振って、裕介はそれだけ答えた。

「？変なヤツ」

恭子はそういうと、また自分の世界に戻っていった。

「まったく・・・和歌月はとうだ？」

今度はもう一人の幼馴染、和歌月花恋のほうに向いてみた。

青く見えるほど美しく長い黒髪がゆるやかに波打っているのが印象的な、おとなしく気品を感じさせる美少女。

実際彼女は平安から続く貴族という家柄の上、実業家の親族を持つ、お金持ちのお嬢様だ。

彼女はうれしそうに、ノートに何かを書きしたためている。

「え、あ・・・そうですね」

話しかけられた花恋は、なぜか顔を赤くして、そそくさとノートを机の中に押し込んだ。

裕介が一瞬見てしまった中身は、雑な文字と綺麗な女性らしい文字が、一ページづつ交互に埋め尽くされているようだった。

おそらく、彼氏と交換日記のようなものをしているのだろう。

メール全盛のこの時代に、ずいぶん古めかしいことをしているな、と思ったが、彼女の性格と育ちを鑑みるに、それはそう不思議なことではないような気もした。

「ありきたりですが、喫茶店なんていかがでしょう？」

少考して、花恋は控えめに意見を言ってみる。

「なるほど、喫茶店ね」

裕介が面白そうにうなずく。

確かにありきたりだし、たぶんどこかのクラスと出し物がかぶつてしまっただろうが、クラスで何か特色を出していけば、それはそれで面白そうだった。

「なんでしたら、私がコーヒーメーカーと豆ぐらいでしたら提供させてもらいます。コーヒーをうまく淹れるのは、私の趣味でもありますし」

「おお、それは本格的だな・・・」

気品を感じさせる美少女の花恋が、豆から淹れたコーヒーを客に振舞う。

これは絶対に当たりそうだ。

そうだ、どうせなら。

「なあ、和歌月。お前の家にお手伝いメイドさ・・・お手伝いさんがいたよな？」

「ええ。今は5人ほどが私の家で働いてくれますね」

質問の意図が分からず、首をかしげながら花恋は答える。

「その人たちの着てるメイドふ・・・じゃない、エプロンドレスを借りられないか？」

「エプロンドレス？あの作業着のことですか？必要であるなら準備しますが……。なににお使いに？」

さらに怪訝な顔をする花恋。

「接客を希望する女子にそれを着てもらって、ウエイトレスをやってもらうんだ。だいぶ落ち着いたけど、まだまだブームは去ってないし。ブームってか、最近は定着してきた感もあるよな。本物のコーヒーに、メイドふ……。じゃない、エプロンドレスを着た女子生徒が接客。これは当たるぞ」

「ブーム？定着……。？」

首を再びかしげる花恋。

純粹培養のお嬢様である花恋に、メイドカフェなるといふものが存在するということは、まったくの想像の外だろう。

「まあまあ、いいから。とりあえず提案してみる」

騒がしい周りに負けないように、裕介は大きな声とともに挙手するのだった。

「……ではわがクラスの出し物は『エプロンドレス喫茶』に決まりました。皆さん、拍手！」

何とか脳溢血の危機を免れた委員長は、クラスメイトたちに拍手を

促した。

積極的な拍手をするのが半分、消極的ながら拍手をしているのが残りの2/3。

残りの1/3が無関心層だった。

「では、出し物の準備ですが・・・」

委員長がちらり、と発案者の裕介の顔を盗み見る。

「それは和歌月から提案があるそうだ。聞いてやってくれ」

おずおずと花恋が立ち上がり、先ほど少し裕介と話していた出し物のアイデアを、大まかに説明し始める。

「作業着・・・エプロンドレスっていいんですか？それと豆とそれを引くミル、コーヒーメーカーは私が用意させていただきます。おいしいコーヒーを入れるには、水も重要です。これも私が準備します。本当は豆をひいてから3、4時間たつまでに飲むのが一番おいしいのですが、それは難しいと思いますので、前日までに予想されるお客様の分の豆を引いておくことをお勧めします。豆をひく指導は、僭越ながら私がさせていただきたいと思っています。それとこれは蛇足になるかもしれませんが・・・」

生き生きとした表情で、長々とコーヒーを語る花恋。

本当にコーヒーが好きなのだろう。

クラスメイトたちは半ばあきれながらも、微笑ましそうにそれを聞

いていた。

恭子は相変わらず無関心を貫いて、一生懸命将棋の本を読んでいる。

「では、次に担当を決めたいと思います。・・・接客をしたい人！」

委員長の一言に、クラスの女子がざわめいた。

接客係は当然、メイド服を着ることになる。

「エプロンドレスねえ・・・」

「着てみたいってのはあるけどね。デザインにもよるけど」

「いらつしゃいませ、ご主人様」とかいうのかしら？前ア。バの特集でTVでやってたみたいに。相手がイケメンだと言ってもいいけど。TVに写ってたようなオトコには、いいたくないわね」

と、なんやかんや。

そこに裕介の声が飛んだ。

「西里。お前この前、将棋の本に載ってたエプロンドレスを着た女の子の写真見てたろ？どうだ、お前も」

「ああ・・・」

恭子は思い出していた。

将棋の月刊誌に載っていた、メイド服を着た女流棋士たちのスナッ

プ。

あの写真は女流棋士が、ファンサービスで着ていたものを撮影したものだ。

恭子は女流棋士が着ていたあの衣装に、底知れない違和感を覚えた。

『戦う女の着る服ではない』

はやりか何か知らないが、将棋のプロとして戦う女性の着る服ではない、と恭子は感じていた。

「あたしはイヤね。あんなひらひらした服装……。冗談じゃないわ」

手をひらひらさせて、絶対拒否の姿勢を貫く。

「ええー・・・そう否定せずに。西里ならきつと似合っつて」

なぜかどうしても、裕介は恭子にメイド服を着せたいようだった。

ほかの男子も追随する。

「確かに、西里は似合いそうだな」

「俺的には、めがねとかもかけてほしい。切れ長の目に似合いそう」

「おいおい、ツンデレめがねは反則だろ？」

「なんだよ、ツンデレめがねって？」

「・・・知らないなら知らないほうが幸せだぞ」

と相当な妄言が飛び交っている。

普段そっけないというか、淡々としてるので、声をかけるものこそいないが、実は恭子の容姿は、クラスの男子の中で相当評価されている。

かわいい系というより、美人系の顔立ちだ、と。

その筋の生徒たちからは『ツンデレ』とか『長門系』とか言われている。

深い意味は問うまい。

「とにかく、あたしはいや。・・・そうだ」

何か本人的には、面白いことを思いついたようだ。

そこで、HRの終わりのチャイムが鳴る。

チャイムとともに、恭子の声が教室中に響き渡った。

「あたしに将棋で勝てる人がいたら、着てもいいわよ。別にこのクラスでなくてもいいわ。とにかく、あたしに勝てる人を連れてきたら、どんな衣装でも着てあげる」

その日の放課後。

恭子は爆弾発言をぶち上げて、早々に教室から出て行き、帰路についてしまった。

「言つとくけど、初段二段つれてきても、あたしの相手にならないから。ああ、角ぐらいなら引いてもいいわよ？」

という捨て台詞を残して。

「ちよつと・・・恭子さん！」

一番の友人である花恋も、あわてて恭子のあとを追って出て行ってしまった。

恭子の一言は女子生徒からは、はっきりいってブーイングものだった。

角引くの意味はわからなかっただろうが、クラスの女子生徒たちに非常に上から目線の態度のようにとられてしまったようだ。

なにさまのつもりよ。

ちよつと美人だからって。

そんな女子の声をよそに、男子たちは真剣に討論していた。

「将棋かあ・・・俺、ルールも知らんわ」

「俺もルール覚えてるかなあ・・・小さいとき、爺さんに教わっ

ただ、それっきりだな」

「日曜日の朝にN。Kでやってるやつだよな。にじゅびょーとか」

「そうなんじゃないか？」

と、今の時代、高校生と将棋のつながりなんて、こんなものである。

「パソコンと勝負させるってのはどうだ？オレのアニキが将棋少しやってて、このソフト勝てねえ、とかつぶやいてたぞ」

クラスメートの提案に、裕介が口を挟んだ。

「あー・・・ダメだと思うぞ。この前あいつとPCの話したら、なぜか急に将棋の話になって、いくらコンピューターが強くなったからっていつても、あたしクラスとかプロの相手じゃないとか言ってたから。量子コンピューターでもつれてこい、って豪語してたな・・・。あのアナログ女から量子コンピューターって言葉が出たのも驚いたが」

そう、恭子の家にはパソコンがないのである。

携帯は一応持っているようだが、電話の機能しか使っていないといっていた。

メールも打てないらしい。

「量子コンピューターとは大きく出たなあ・・・」

量子コンピューターは風呂敷を広げすぎにしろ、恭子は今の将棋ソ

フトぐらいなら、あしらう自信があるのだろっ。

「将棋・・・将棋ねえ」

教室の隅っこでこちらのやり取りを聞いていた一人の男子が、なにやら思案顔をしていて、何かに思い当たったようだ。

「俺の友達に伝があるかもしれん。ちと聞いてみておくわ」

「恭子さん・・・なぜあんな挑発的なことを？」

心配そうな顔で花恋が聞く。

はつきり言って恭子はクラスで浮いている。

花恋と裕介以外、教室でほかの誰かと話しているのを見たことがない。

違うクラスだった1年2年のときの友人が、恭子を訪ねてくるということもなかった。

「そうね・・・ちょっと喫茶店でも入ろっか」

恭子はたまに幼馴染3人で寄る、小さな喫茶店を指差した。

「それはかまいませんが・・・」

先に店に入った恭子のあとを追い、花恋も喫茶店の扉を開ける。

からんからんからん、と来客を告げるベルが小さな店内に響き渡った。

店に入ると、焙煎されたコーヒー豆の良い香りが鼻腔をくすぐる。

花恋の好きな香りだ。

5つほどのカウンター席と、2つの4人が座れるテーブル席。

午後4時という中途半端な時間のためか、この時間帯は客が少ないことが多い。

今日もやはりというか、自分たち以外に客はいないようだった。

先に店に入った恭子は、いつもの席、奥のテーブル席に腰掛けていた。

花恋はいつもと違う場所・・・いつもは恭子の隣で、恭子と花恋と向かい合うように裕介が座ることが多い・・・恭子の対面に腰掛けた。

「なににいたしましたしょう？」

制服の女子高生相手にも丁寧な声をかけながら水を二人の前においたのは、妙齢の女主人だった。

どうやら彼女一人でこの店を切り盛りしているらしい。

「あたしホットケーキセット。アイスコーヒーで」

恭子は頼むものを決めていたようだ。

メニューも見ずに注文を出す。

「私は・・・」

花恋がメニューに目を通しだすと、女主人は軽やかな笑みを浮かべて

「お客様、今日はいいいモカが入ってますよ。いかがですか？」

と聞いてくる。

彼女は花恋がここで幼馴染二人を相手に、コーヒー談義をしていたのを覚えていたらしかった。

「では、それをお願いします」

「かしこまりました。しばらくお待ちください」

二人の注文を聞き終えると、女主人はカウンターの奥へと向かった。

ここのコーヒーはサイフォンで淹れている。

花恋もサイフォンでいれることが多いので、女主人、すなわちプロの淹れ方は参考になった。

「コーヒーなんてどれも一緒でしょ・・・とか思わないでもないけど、将棋の駒と一緒にいろいろ分かれてるのよね」

水の中の氷をからからいわせながら、あまり興味なさそうに恭子が言う。

「そうですね。有名な銘柄だとブルーマウンテン、キリマンジャロ、エメラルドマウンテン、といったところでしょいか。私がさっき注文したモカなんかも、愛好家には人気がありますね」

興味なさげな恭子の態度も気にもとめず、花恋は丁寧に説明する。

共通の興味の話題以外の話、たとえば裕介はテニス、花恋はコーヒ―、恭子は将棋の話が出たときは、たいていお互いこういう反応になる。

素っ気なさそうに見えるが、3人の友情はこれでうまくいっているのだ。

「そうそう、あたしの発言の話ね」

恭子のかばんの中から扇子を取り出し、暑くもないのにパタパタと仰ぎだす。

彼女は年がら年中、歳に似合わない扇子を持ち歩いていた。

プロ棋士の習慣を真似ているらしい。

白地の扇子で、そこには大きく『王将』と書かれてあった。

「なんか、ここの所燃えないのよね」

扇子を少し開けたり閉じたり、ぱちんぱちんといわせながら恭子は

言う。

「燃えない、と申しますと？」

「将棋よ。あたしの通つてゐる道場じゃあ、もう一番強くなつてしまつたし。県内の強豪と指すこともあるけど、そんなチャンスめつたにないし。こう、燃える相手が身近にいないのよ。もちろん、飽きたわけじゃないのよ？ インターネットにはあたしより強いのはごろごろいるし。でも将棋ってさ」

お待たせしました、と女主人が先に恭子の注文したアイスコーヒーを持ってきた。

恭子は前に置かれたアイスコーヒーに、ミルクとシロップを入れて、からからとかき混ぜる。

「やっぱり、盤をはさんでこそその真剣勝負だと思うのよ。それでちよつと、あたしの知らない強い人がいたらいいなあ、と思つていつてみただけ。別に挑発したつもりはなかつただけだね」

そついうと恭子は一息ついて、ずずずー、とアイスコーヒーをすする。

それからすぐに、女主人が恭子の注文したホットケーキと、花恋の注文したホットコーヒーを持ってきた。

「そつでしたか」

花恋はそれで納得した。

だが・・・やはりクラスの女子たちには、あの発言は面白くなかっただろう。

恭子は昔から唯我独尊的なところがある。

両親を亡くしてから、さらにその傾向が強まったように花恋には思えた。

いまさらクラスに溶け込こんでくれたら、なんて思わないが、それでもクラスで嫌われるような人にはなってほしくない友人として思う。

恭子も、根は悪い人間ではないのだから。

「まあ、接客をするかどうかはおいておいて、文化祭をみんなで取り組んで楽しむのは、悪くないと思いますよ。接客が乗り気でないのでしたら、コーヒーを淹れる係になつてはいかがでしょう？若輩ながら、私がおいしい淹れ方をお教えしますよ」

親切にそういつてくれた花恋に恭子は、

「まあ、気が向いたらね・・・」

とだけ返事して、ぱくり、とホットケーキを口に放り込んだ。

（続）

将棋少女恭子の日常：第三話（後書き）

第三話をお送りします。

ここまででは書きあがっておりますので、すんなり更新できました。週に一度は更新したいなあ・・・とは思っています。

実は・・・ソフトはすでに、アマトップを越えているようです。

これを書いたときはまさかアマトップの二人がソフトに敗れるとは夢にも思っておりませんでした。

トッププロにソフトが勝つ日も、遠くないな・・・。

感想批評お待ちしております。

将棋少女恭子の日常：第四話

文化祭も近づいた、ある日の放課後。

担任教師に頼まれた仕事を片付け、恭子が帰路につこうとすると。

「西里、ちよつといいか？」

急にクラスの男子に呼び止められた。

「どうしたの？」

「いや、文化祭のことで、ちよつと。隣のクラスにきてくれないか？」

歯切れの悪いクラスメイトの言葉に、恭子は怪訝に思いながらも

「わかったわ」

と返事した。

隣のクラスの教室に着くと、予想外の光景が広がっていた。

そこには、きつちり駒が並べられた将棋盤が置かれた机。

ご丁寧に、対局時計まで設置してあった。

その机にはギャラリーも多数張り付いている。

ギャラリーの中には裕介や花恋もいて、にこやかに手を振っていたり、ペコリ、と頭を下げたりしてきた。

そういえば放課後、いそいそと二人して教室を出て行っていたのを思い出した。

「・・・？これは・・・？」

恭子は訝しげな顔で、ここに連れてきたクラスの男子の顔を見る。

「西里、お前より将棋の強いのをつれてきて負かしたら、エプロンドレス着て接客してくれるんだらう？それで、強いのをつれてきたってわけさ」

「・・・あつそ」

多少驚きはしたものの、そういうことか・・・と納得する。

なぜそれほど自分に接客業務をさせたいかはまったく理解できなかった

つたが、将棋を指せるのはやぶさかではなかった。
わざわざ学校につれてきたぐらいだ、そこそこ将棋の腕も立つのだ
ろう。

せいぜい、楽しませてもらうとしよう。

「対戦相手はもう座ってるよ。西里が来るのを待ってたんだ」

ここに案内した男子生徒が、くいくいとその机を親指で指す。

恭子はギャラリィをかき分けて、盤の置かれた机に向かう。

ちらり、と対局相手の顔をうかがってみた。

「！！」

その瞬間、恭子の顔が確かに凍りついた。

あまりにも場違いなものを見たときの表情だ。

「い・・・十六夜三段！？」

恭子の大声に反応するように、いままで黙ってうつむいていた一人
の男の子が顔を上げた。

歳は恭子たちより、少し年下に見える。

ただ、その目には青少年らしくない、鋭い光が宿っているような気がした。

「僕をご存知でしたか。光荣です」

男の子は屈託のなさそうな笑顔でこちらを見る。

「ちよ、ちよっと！この人を連れてきたの、誰なの！？」

普段冷静沈着っぽく見える恭子があわてたものだから、みな物珍し
そうにこちらを見つめている。

そのうち、ギャラリィの中の一人の男子が、手を上げた。

「あー。彼、俺のイトコなんだ。今日は無理言ってきてもらった」

このクラスの生徒だろうか、恭子の知らない顔の男子が、しれっと
そう言つてのける。

「無理してきてもらったって・・・」

恭子は思わず天を仰いでしまった。

そんな様子を見て、裕介が声をかけた。

「でも西里。彼、三段なんだろう？それなら四段って言ってたお前

のほうが強いんじゃないか？」

のほほん、という裕介に、恭子は猛烈に抗議した。

「バカいわないでよ！彼はアマチュアの三段じゃなくて、奨励会の三段なの！あたしとじゃメジャーリーグの三番と草野球の四番ぐらいの差があるわよ！」

奨励会とはプロ棋士の養成機関で、そこを勝ち抜いて四段にまでなれば、晴れてプロ棋士として将棋を指してお金をもらえる身分になる。

つまり、彼はプロ一歩手前の实力を持つ将棋指しなのだ。

「将来の名人候補といわれている十六夜三段が相手だなんて・・・」

恭子は信じられない、というふうに目に手を当ててふるふると頭を振った。

そんな恭子を見て、十六夜はおずおずと提案した。

「あ・・・もちろん平手では勝負にならないでしょうから。飛車落ちぐらいでいかがですか？」

十六夜三段はできるだけ丁寧に、こちらに提案したつもりだったのだろう。

平手というのはハンデがついてない将棋のことで、飛車落ちというのは、大体自分より四段階下の相手につけるハンデ戦のことである。しかし、この一言で恭子の闘争心に火がついた。

彼はこう言っている。

『アマのお前じゃ将棋にならないから、ハンデつけてやるよ』と。

「・・・いや、現役の奨励会三段、それも将来の名人候補と指せる機会なんて、そうそうないから・・・平手で教えてもらえるかしら？」

引きつった笑顔でそういう恭子に、今度は十六夜が面白くなさそうな顔をした。

弱いくせに・・・。

どこかに、そんな気持ちがあるのだろうか。

しかしすぐに元の屈託ない笑顔に戻ると、

「僕はいけませんよ。では、始めましょう」

「持ち時間はどうしますか？」

十六夜が対局時計を片手に、恭子にそう聞く。

将棋には持ち時間のルールがつくときがある。

プロの棋戦や奨励会の例会での将棋は厳密に持ち時間が設定されているし、アマチュアでも大会となると、持ち時間を設定してある大会が多い。

もちろん、これが切れると負けである。

恭子は少考するふりをして、

「ネットと同じで。持ち時間一分、切れたら30秒で」と答えた。

「それで、いいのですか？」

「ええ、もちろん」

恭子は知っていた。

十六夜三段が、やたらめったら早指しに強いことを。

奨励会有段者の持ち時間は90分、切れたら秒読み1分だが、十六夜はこの一分将棋になってからの強さが並ではないといううわさを、同じ道場に通っているアマ強豪から聞いたことがあった。

持ち時間が切れるころには将棋は終盤に入っている。

将棋は終盤が一番難しい。

なぜなら、どんなに優勢でも、ここで間違えると敗北に直結するからだ。

その難しい終盤で、時間がないのに間違えない。

鋭くて、正確な手を確実に指してくる。

一部の奨励会員からは「十六夜は時を操る能力でも持ってるんじゃないか？終盤になると時を止めてその隙に指しているとか」とまことしやかに囁かれているほどだ。

しかし、恭子もまったく勝算なく、意地や勢いだけでこの持ち時間を提案したわけではない。

恭子の言ったとおり、有段者はネット将棋で持ち時間一分、切れたら30秒で指すことが圧倒的に多い。

普段コンピュータと無縁の生活を送っている恭子だが、将棋道場に適当な相手がなくて、暇をもてあましているときは近所のネットカフェに行つてネット将棋を指すことも多かった。

（恭子が自宅にパソコンをおかないのには訳があるのだが、それはまた後日）

つまり、この持ち時間は恭子にとって『自分の土俵』でもあるわけだ。

対局時計がセットされ、先手後手を決める振り駒が行われる。

振り駒とは先手後手を決める、一種の儀式みたいなものである。

十六夜が「先手どうぞ」と勧めたのだが、「いや、振り駒で」と恭子が提案した。

上位者である十六夜が（奨励会員とアマチュアが指す場合は、アマチュアがプロを目指している奨励会員に敬意を払い、年齢性別に関係なく、奨励会員を上位者扱いするのがマナーである）歩と呼ばれる小さな駒を5つ振り、歩兵と書かれたほうが2枚、『と』と書かれたほうが3枚でた。

「西里さんが先手ですね。お願いします」

ぺこつと頭を下げ、十六夜は対局ボタンを押した。

恭子のほうの時間が、徐々に減り始める。

「お願いします」

恭子が気持ちを落ち着け、初手を指す。

十六夜も、間髪いれずに二手目を指した。

ここからは、誰も入れない二人きりの、小さな盤上で、無限大に広がる宇宙での対戦である。

（相振り飛車か）

戦形は恭子も良く知っている形になった。

将棋には大きく分けて、二つの戦法がある。

ひとつは最大の戦力の飛車という駒を最初の位置から動かさずに戦う『居飛車』。

もうひとつは飛車を最序盤のうちに左側に動かして戦う『振り飛車』である。

この飛車を左側に動かすことを『飛車を振る』という。

ちなみに居飛車を持って戦うことが多い人を『居飛車党』、振り飛車を持って戦うことが多い人を『振り飛車党』と呼んでいる。

恭子も十六夜も『振り飛車党』なので、二人とも振り飛車にする可能性はかなり高かった。

二人とも飛車を振った状態で戦いに入ることを、『相振り飛車』というのだ。

この形になって、恭子は「しめた」と思った。

この戦形は昔から『下位者が一発入れやすい』戦法としても知られている。

昔の大名人も、『相振りは下位者に有利な戦法だから、好きではない』とっていたぐらいだ。

（それにしても・・・）

ぱちっ！と駒音高く指す恭子に比べ、十六夜は『ぱちり』と静かな駒音である。

恐ろしいほどの気合で盤をにらんでいる恭子に比べ、十六夜は少しだけ考えさせられる数学の問題を眺めているような表情だ。

本気で指していない。

将棋にまったく興味がない人が十六夜の顔を見ても、わかりそうな雰囲気である。

恭子は思った。

勝つのは難しい。

相手は将来の名人候補とまで言われている将棋指しだ。
でもせめて、相手を本気にさせてやろう。

一回だけでも、苦しめてやろう。

恭子は将棋を指していて久しく感じていなかった闘志の燃え上がりを感じていた。

お互い持ち時間の1分を消費し、秒読み30秒に入って、盤面は中盤に突入していた。

何名かの女子も混じった、将棋を知らないギャラリイ達が将棋のルールを知っている生徒に「どっちが勝ってるの？」と盛んに聞く。聞かれた生徒たちの答えは決まって「わからない。同じぐらいじゃないかな？」だった。

その答えは間違いではなかった。

プロ一步手前の十六夜も、アマ高段者の恭子も、『まだまだ難しい局面』と見ていたのだから。

しかし、均衡の崩れるときがやってきた。

恭子が一手、ぬるい手を指してしまったのである。

ぬるい手といっても、並のアマチュアではとても咎められないような、悪手とまではいえない手だった。

だが十六夜はそれを見逃さずに強烈に責め立てる。

その手を境に、恭子は防戦一方に追い立てられてしまった。

「くっ・・・」

恭子のくちびるから、思わず苦悶の声が漏れる。

綺麗な顔が、苦悩にゆがむ。

対して十六夜は対局前とほとんど表情が変わっていない。

手つきも対局中まったく同じで、駒を小さくぱちり、といわせて指し進めるだけだ。

冷静、というより興味のないような感じだった。

相手の冷めた表情が、余計に恭子の感情を刺激した。

しかし恭子は、懸命にその感情を押さえ込もうと努力する。

将棋は技術が大切なのはもちろんだが、キレないようにする心の持ちようも大切なのだ。

耐える、耐えるんだ。

相手が強いのはわかってる。

でもきつと、チャンスは来る。

恭子はそう念じ、相手から奪った駒を防御に回した。

中盤も、そろそろ終わりに差し掛かっている。

時計が刻むデジタル音を聞きながら、恭子は絶望的な思いで盤を見つめていた。

（大差だわ・・・）

ルールを覚えたぐらいのレベルではわかりにくいだろうが、少し将棋の腕に自信のあるものなら、この局面を見て恭子側を持って指したい、という人間はいないだろう。

それほどの大差だった。

どうしよう。

もう投げようかしら。

そうよ。

大差の中、詰みが分かるまで指し続けるなんて、余計に相手にバカにされそうな気がする。

相手は無表情だが、『この局面から、まだ指すの？』といているような気もする。

それに、こんな辛い局面、こんな強いのを相手にして、もう指したくないわ。

投げてしまおう。

負けました、といって、楽になろう。

真剣だった恭子の表情が、糸が切れてしまったかのように緩んだ。

『負けました』

あと何瞬か遅かったら、そう発していただろう。

「西里！」

聞きなれた声が、大きな音量で飛んでくる。
裕介だった。

「あきらめるなよ。お前、俺と将棋指していたときに『最後まであきらめちゃダメ』って怒ってたじゃないか。王様、まだ詰んでないだろう？がんばれよ！」

将棋というのは、相手の王様を先に動けなくしたほうが勝ちのゲームである。

この王様が動けない状態を将棋用語で『詰み』という。

裕介は『完全に負けたわけじゃないだろう？がんばれ』と喋っているのだ。

（青木のヤツ。強くないくせに言ってくれるわね）
これだからへボは。

どうせ、今の局面がどれほどの大差か分かっていないんですよ。

そりゃ覚えてたのレベルなら、王様の頭の上に金に乗るまでやってても恥ずかしくないわよ。

でもね、あたしぐらいのレベルになると……。

（あたしぐらいのレベルになると……なんなの？）
なによ。

そういうあんたは、そんなに強いの？

こんなボコボコの局面にされているくせに。

弱いくせに、格好つけるなよ。

どうせなら、最後までやろう。

王様が詰むまで、この強い将来の名人候補と戦おうじゃないの。

「そうよね、最後までがんばらなきゃね」

恭子はそうつぶやくと、駒台から銀将と書かれた駒をつまむと、ぱちっ！と今迄で一番高い駒音を立てて、粘るためにそれを自陣に打ち付けた。

それから戦いは延々と続いた。

一手30秒将棋にもかかわらず、もうすぐ開始から1時間以上は経っている。

恭子はすでに肩で息をしていたし、無表情だった十六夜も時折大きなため息を漏らすようになっていた。

将棋というゲームは、見た目以上にハードなボードゲームなのである。

プロの将棋指しは対局の翌日体重を量ると、2・3キロ体重が落ちていることがあるそうだ。

アマチュアでも本気で指した大会の翌日など、疲れが残ることもある。

十六夜は明らかに恭子の頑強な粘りにいらついてきているようだった。

そのいらつきが原因だったのだろうか。

正確無比だった、時間を操るとまで言われた十六夜の指し手に、とうとう一手の悪手が出た。

恭子は持ち前の勝負勘でその悪手を嗅ぎ取る。

ようやくようやく、恭子にチャンスが来たのだ。

恭子は気合良くばちいっ！と銀将を将棋盤に叩きつけた。

こちらを攻めている十六夜の表情が、その一手を見て変わった。無表情だった十六夜の表情が、その一手を見て変わった。

比喻ではなく、彼の顔がさあっ・・・と青くなったのである。

「・・・っ！」

十六夜の、声にならない驚愕の声。

ひっくり返った・・・？

いや、まだ互角だ。

落ち着いて指せば、俺が勝つはずだ。

名人候補の俺が、アマに負けるわけがない。

負けては、いけないのだ。

この将棋で初めて、十六夜は大きな駒音を立てて、駒を盤に叩きつけたのだった。

二人の迫力に、ギャラリーは無駄口さえ叩けないでいた。ギャラリーの中にいる女子達はルールさえ知らないはずだったが、食い入るようにして二人の表情と盤上に見入っている。ギャラリーたちは、初めてリアルに見たのではないだろうか。人が真剣に戦う様、というものを。

もう盤上は乱戦に次ぐ乱戦で混乱の極みに達していた。

将棋のルールを知っているものが見たら、将棋の強弱関係なしに『どんな将棋を指せばこうなるんだ？』と疑問に思うような盤上だ。十六夜の一手の小ミスを恭子が咎めたことから大混戦になり、もうどちらが勝ってもおかしくない状態にまで恭子は十六夜を追い詰めていた。

ここからは、集中力と気合の勝負だ。

先に心が『切れて』しまったほうが負けてしまう。

恭子も十六夜も心の悲鳴のような高い駒音を立てて指し進める。

一手に与えられているわずか30秒の時間を、ぎりぎりいっぱいまで使って考える。

（キツイ・・・）

恭子は心中でそう漏らした。

もう開始から1時間半近くが経過している。

延々と30秒将棋を指し続けている。

こんな将棋は初めてだ。

相手が奨励会の三段だとか、将来の名人候補だとか、そういう雑念は恭子の意識の中から消えていた。

目の前の将棋に勝ちたい。

それだけだった。

長い長い激戦に、ピリオドを打つときがやってきた。

「・・・・・・・・・・！」

その手を指した瞬間、失敗を表情に出さないようにするには、相当な労力が必要だった。表情に出してしまえば、相手がこちらのミスに気づく可能性が高くなる。

間違った。

とうとう、間違った。

この一手で、詰みが生じてしまった。

きわどいところで均衡を保っていた終盤の天秤が、この一手で重々しく音を立てて傾いてゆく。

相手もこちらの間違いに気づいたのだろう。

さらに駒音高く、駒を押し進めてくる。

わずかに17手詰めだ。

ここまで指してきた相手が、いまさら間違っわけがなかった。

ばちっ！

あと15手。

ばちっ。

あと13手。

ばちっ！

あと11手。

ばちっ！

あと9手。

ばちっ！

あと7手。

ばちっ！

あと5手。

ばちっ！

あと3手。

ピッピッピッ・・・と対局時計が秒を刻む。

残り5秒。

ピー・・・と発信音が長くなった。

この発信音が鳴り止めば、時間切れで自分の負けだ。

残り、1秒。

そこまで考えて、対局時計の中断ボタンを押した。

そして、恭子は駒台に手を置き、頭を下げてこういった。

「負けました」

しばらく、両者は無言だった。

ギャラリーも、誰も声を発しようとしなない。

そんな中、恭子がいきなり立ち上がった。

「ちよつと。ごめん。感想戦はあとで」

そういうと恭子は駆け足で教室を出て行った。

一同がぼかん、とする中、裕介と花恋だけは顔を見合わせると、お互い「うん」とうなずいて恭子のあとを追うのだった。

恭子は廊下の一番端までやって来ると、そこでびたり、と立ち止まった。

すぐに裕介と花恋が追いつく。

「西里・・・」

「恭子さん・・・」

二人に声をかけられても、恭子はこちらを振り向こうとしない。恭子から発せられたのは、とても大きい慟哭だった。

それは敗者の、本気で戦い敗れた者の、悲痛な慟哭だった。

「うん、そうね。その手が悪くて苦しくなった、と思ったわ」

「ですよ。ここでは僕は勝った、と思っていましたけど・・・この手が辛くて」

泣き疲れて一段落した恭子は、裕介と花恋と一緒に目を赤くして教室に帰ってきて、何事もなかったかのように感想戦を行っている。感想戦というのは、対局後に対局者同士が行う反省会のようなものだ。

熱心に観戦していたギャラリーたちも、感想戦が始まると徐々に散っていく、今は大体最初の1/3ほどが感想戦の様子を見守っている。

「まあ、ここからはあたしの勝ちはなさそうね。・・・っと。この辺にしておきましょうか」

さすがに疲れた恭子が、感想戦の終わりを提案する。

「ですね。いや、いい勉強になりました。ありがとうございます」
十六夜も素直にそれを受け入れ、ペコリ、と頭を下げる。

「こちらこそ勉強になったわ。ありがとうございます」

両者いい笑顔で、終局の挨拶を交わし、握手を交わす。

「三段リーグ、がんばってね」

恭子のその言葉に十六夜は少し表情を固めて

「はい。がんばります」

と返事した。

彼はプロを目指している。

三段リーグとはプロを目指す者にとって最後の関門で、奨励会で三段まで登りつめた30人前後の猛者たちで18番のリーグ戦を行い、上位2位までに入らなければ四段になれない厳しいリーグである。年齢的におそらく彼はプロになれると思われるが、奨励会の世界にはそんな保障はどこにもない。

プロを目指す彼とは、あたしはもう指す機会はないだろう。

でも、袖触れ合うも他生の縁。

彼には絶対、夢をかなえてほしい、プロになってほしいと願う恭子だった。

「あゝ、久しぶりにいい将棋を指したわね。さて、帰りましょうか」

いい笑顔でそういう恭子に、数名の男子と一人の女子がいやらしい笑みを浮かべて近づいてくる。

「・・・・・・？・・・・・・？なによ」

あまりの不気味さに思わず後ずさりする恭子。

「にしさと。将棋に負けたら、メイドふ・・・・げぶんげぶん。エプロンドレス着て接客してくれる約束だったよな？」

「今から衣装合わせするから、ちよつと、残ってもらえるかしら・・・・？」

エプロンドレスを片手に、にじり寄ってくるクラスメイト達。

「・・・・・・」

確かに、そういう約束だった。

負けた以上、約束は守るつもりだ。

でも今日はさすがに疲れた。

着せ替えごっこなんぞに付き合っている体力も気力も、さすがにない。

特に気力のほうの萎えは深刻だった。

やばい。

このままでは、あたしは詰まされてしまう。

こういう場合は。

「え・・・・。将棋にはこういういい言葉があります」

恭子はくりと背を向け、こう叫びながらダッシュで逃げる。

「王の早逃げ、八手の得、ってね！今日は、さよならっ！」

「あゝっ！逃げた！西里さん、接客あけとくから、絶対ちゃんと仕事してよっ！」

クラスメイトの非難の声に、恭子はふらふら手だけを振ってこたえた。

それから2週間が経ち、さて、文化祭当日。

「い、いらつしゃいませ」

ぎこちない恭子の声が、喫茶店に模様替えした教室に響き渡る。

クラスの綺麗どころがエプロンドレスを装着して接客しているせいか、コーヒーのうまさがとても高校の文化祭で飲めるレベルとは思えないほど超越しているからか、その相乗効果なのか、客は列をなしてこの教室に押し寄せてきていた。

「おお、西里。じっくり見てもやっぱり似合ってるな」

「そうですね、恭子さん。とってもかわいいですよ」

大道具の係で当日暇になった裕介と、コーヒー指南がひと段落した花恋が、接客している恭子をからかいに来たようだ。

「・・・。まったく、こんな格好させて接客だなんて、何の意味があるの？しかもやたら客は来てるし」

恭子はエプロンドレスにカチューシャ、それに『きょうこ（はあと）』なんて書かれたネームプレートまでつけて接客の仕事に従事していた。

エプロンドレスはともかく、カチューシャとネームプレートは約束の範囲外だ、と必死に抗弁したが、クラスメイト達の『将棋、負けたんですよ？』の一言に、恭子は抗うすべを持たなかった。

「きょうこさん。写真一緒に撮ってください！」

教室のどこかから、そんな声が飛んできた。

3人組の、他校の男子のようだった。

「あー・・・はいはい。今行きます・・・」

「おいおい、写真まで撮らせてるのか？いいのかよ」

とぼとぼ歩いてそちらに向かう恭子に、裕介が驚きの声を上げる。

恭子があきれたように首を横に振って、ちよつと事情を説明し始めた。

「最初、他校の男子に『写真一枚いいですか？』って聞かれて。まあ、別にそれぐらいいいか、と思っていいますよ、って言ったら撮っていいんなら俺も！とか言う人が続出して」

「まあ、メイドカフェでメイドの撮影が厳禁、ってのはいまや常識だからな・・・」

「なんだか、えらく範囲のせまそうな常識ね……。それはともかく、それでちよつとした混乱になりかけたんだけど、委員長があわててそこにある張り紙作ってね」

恭子が指差す先には、『メイドの撮影を厳禁す』と書いてあった。

「でも最初のヤツだけ撮影してずるい！って言い出すヤツがいて。それに便乗するやつも現れて。それで委員長、『西里さんが許可したんだから、あなた責任とりなさいっ！』ってヤケ気味に・・・」

「そうか・・・」

「きょうこさん！はやく〜！」

さっきの3人組の、催促の声。

「はいはい、すぐに行きますよ・・・」

とぼとぼながら呼ばれたほうに向かう恭子。

その三人組に、

「あの、無表情でお願いします」

なんていわれたりしている。

そんな恭子を見て、昔からヘンに律儀なヤツだったからなあ・・・と妙な感慨にふける裕介と花恋だった。

後日談。

文化祭からしばらく、恭子のエプロンドレス写真は、学校闇社会で高値で取引されることになった。

その筋の人からは『長門似の美少女』として。

一般人には『なかなかかわいい女の子の写真』として。

それ以外にも、文化祭にいたるまでに恭子にちよつとしたエピソードがあつたのだが・・・それはまた別のお話。

将棋少女恭子の日常：第四話（後書き）

お久しぶりです。

って、もう誰も覚えていらっやらないかもしれませんが（笑）。
ほぼ、2ヶ月ぶりの更新となります。

この間にハチワンダイバーという将棋を題材にしたドラマもありましたし、ひょっとしたらこの小説に興味を持ってくださる方も若干増えているかもしれませんね。

今回の恭子の対戦相手、十六夜三段ですが、もちろん、元ネタはこのゲームの登場キャラです。

面白いですね、あのゲーム。
キャラクターや音楽のタイトルのネーミングセンスにセンスが違うな、と思い知らされました。

次回はいつになるかわかりませんが、読んでやろうという方は、気長にお待ちくださるとうれしいです。

ではまた次話でお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5718e/>

将棋少女恭子の日常

2010年10月9日01時09分発行